

2014年4月

## 「コリーグ」47号 目次

巻頭言（1～2）センター長就任のご挨拶（3）戦略的研究プロジェクト（3～4）  
第41回研究員集会報告（5）国際会議報告（APA 科研）（6）高等教育公開セミナー  
報告（7～8）2013年度の公開研究会（8）センター往来（9）喜多村和之先生のご  
逝去を悼む（10）新任者・離任者・就職者から一言（11～16）センター滞在記（17）  
情報調査室だより（18）

## 巻頭言



### 高等教育の現況雑感

山本 眞一

（桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科教授）

大学改革が、政府が主導する「マクロ改革」に加えて、個々の大学がこれに対応しなければならない状況、すなわち「ミクロ改革」が本格化してすでに四半世紀、この間、国立大学法人化や認証評価の制度化、個別大型競争資金の増大など、大学運営を巡る環境も大きな変化を遂げてきた。とりわけ2005年の中教審将来像答申が出たあたりからは、大学教育の内容・方法に関する改革論議が盛んになり始め、大学改革のモードが大きく変ってきた。また、一昨年暮れの政権交代以来、現政権は、経済政策の推進とともに、「前のめり」と言われるほど戦後レジームの見直しに執心中で、とりわけ教育分野の改革にはこれまでにない意気込みで臨もうとしているようである。これに高等教育分野も影響を受けて、いまの大学の在り方に対する批判・非難の声は、産業界や一般国民を広く巻き込む形で、一段とその大きさを増してきた感がある。ただ、何事も行き過ぎは禁物である。すでに過去に比べて実体が変わっている大学であるから、その実体の正しい観察に基づいて必要なケアに心がけることが何より重要である。教授会自治の大学はけしからんとの思い込みだけで、無理やり背中を押して崖下に突き落とすような改革をするなら、百害あって一利なしなのである。

その変化する実体とは何か。第一に大衆化が著しく進んだことである。高度経済成長が始まった1960年頃に比べると、進学率や在学者数は約5倍、大学数は3倍を超える拡大を遂げ、今や大学教育はその頃の高専教育の位置づけに近づきつつある。当然、教える内容・方法にも大きな変革がなければならぬ。また、この大衆化の中で見落とされがちなのは、大学教員もまた大衆化が進んでいることである。大学教員の数（短大を除く）は、1960年の4万4千人から2010年には17万4千人に増えた。4倍増である。しかも教員採用の伝統的ルートである大学院、ポスドクからでなく、企業・官庁から大学教員になる者の比率が大きくなっており、2010

No. 47

年度の新規採用教員全体の1割，社会科学分野に限って言えば3割の教員がそのようなルートからの採用である。社会人だからアカデミックではない，とは言い切れないが，大学教員の世界も大いに様変わりである。FDは教員能力の開発と理解されているが，それ以上にこれら大衆化した教員層に対して基本的な訓練を施す場としても注目しなければならないであろう。

第二に実学志向が確実に進んでいることである。世間からは大学が社会のニーズにもっと応えて，役に立つ教育をすべきであると言われ続けている。そしてこれに対して大学の反応は鈍いと思われる。しかし，在学者数の分野別分布は着実に変化を遂げ，例えば医学・薬学・看護学など統計分類でいう「保健」分野の在学者数は，この20年間で2倍強に増え，さらに医学・歯学以外の保健分野では5倍に迫る激増である。他方，伝統的な人文・社会科学系では微増に止まっている。国家資格と結びついた分野に学ぶ学生が増えたということは，大学で学ぶ目的そのものが，アカデミックな専門分野からプロフェッショナルな専門分野の習得に変わり，つまりは専門職業教育が大学教育の少なからぬ部分を占めつつあるということなのである。当然，カリキュラムの密度は濃く，学生は単位習得や国家試験合格を目指して熱心に学修をしているはずである。先般の中教審答申で，日本の学生の学修時間が素少ないという指摘があったが，これは必ずしも全体を見ての議論ではないのである。

第三に偏狭な大学自治の観念は，今やほとんど姿を消しつつある。教育再生実行会議において，教授会の審議事項を限定することによってその力を弱め，学長のリーダーシップを確立させようとの提言があり，これに基づいて法改正が急がれていると聞かすが，これは二重の意味で間違いを犯すものであろう。一つには，教授会が強すぎる大学がどれほどあるかということである。大学を巡る競争的環境の激化のもと，生き残りのためには教授会もこれを考慮しないはずがない。自らの足元が危くなるような抵抗にはおのずから自制が働くのが，今の健全な大学の姿である。現に私が広島大学に在勤していた6年間，教授会の抵抗で改革がうまく行かないのだと思ったことは一度もない。もしうまく行かないとすれば，それは教授会でなく，個々の教員の意識と行動のせいであり，個々の教員の意識を統合し，行動を求めするのはむしろ教授会のプラスの役割であると，私は信じている。

二つには，学長のリーダーシップは教授会の力が弱ければ，それに応じて強くなるとは思えない。学長のリーダーシップを裏付けるのは，学長個人の資質であり，かつ学長を支える人材の資質と支援組織体制である。その意味で，法人化後副学長制度を導入し，事務スタッフも副学長らに直属させたことは良かったが，人材の資質の向上はなおこれからの課題である。SDはその有力な手段であるが，その在り方には大いに改善の余地がある。今回は紙数の制約で，これには触れないが，私自身も多数の論考を書いているので，御参照願いたい。

第四に，大学の経営や教育内容・方法については，以前なら考えられないほど盛んな議論が行われるようになったことである。研修会・研究会も頻繁に開かれ，東京などでは同じ日に二つ以上の会合がどこかで開かれているのが常態となりつつある。このような会合が盛んになるのは結構なことだし，また会合に参加した教職員の意識の高揚は如何ばかりかと思わぬでもないが，中には「尻尾が犬を振り回す」類の議論も見受けられる。つまり目的と手段の取り違えである。大学は言うまでもなく，知識生産や伝達のものである。決して大学経営のために存在する組織体ではない。しかし議論に熱中すると，このことがしばしば忘れられてしまう。民間企業の手法に学べ，米国流の教育方法の「小道具」を導入せよとの声はいかにも心地よく聞こえるが，果たしてその効果はどうであろうか？

このようなとき，頼りになるのが高等教育研究の成果のほうである。しかし，多くの研究者は目前の研究テーマの追求に没頭する余り，大学が置かれている真の現実に関心でありすぎるような気がする。根拠に基づいた政策提言を行い，あるいは現状を忌憚なく分析することによって，21世紀知識社会における大学の本当の役割とこれを実現する方策を提示するなど，力のある研究成果を期待したいものである。

## センター長就任のご挨拶



### At Full Strength

丸山 文裕

2014年4月から高等教育研究開発センター長に就任しました。2年前に国立大学財務・経営センター研究部から広島大学に移りましたが、ずいぶん昔の1981年から1987年まで、東千田町の廣大旧キャンパスで、大学教育研究センター助手として勤務した経験を持っています。その頃センターは、図書館の3階の一部に間借りしていました。専任教員4名、助手3名、センター長は学内の他部局からの先生という小規模な組織でした。

その後、当センターは広島大学関係者のご理解と、偉大な先輩方のご努力によって、専用の研究教育施設を使用でき、専任教員10名、事務および資料室スタッフ6名、研究員2名と規模が大きくなりました。高等教育関連では、国内で最も大きなセンターといえます。

当センターは、高等教育についてのさまざまな基礎研究と応用実践研究、大学院博士課程教育、その他、学内の管理運営および社会貢献の機能を果たしています。海外の高等教育研究者との共同研究、国内の大学および諸機関との連携協力、高等教育関係諸学会を通じての研究、当センター以外の広島大学の学部教育や大学院教育、管理運営等に積極的に関与しています。

国際的な研究活動や日本国内の研究活動、社会貢献活動は、counterpartsも同じ高等教育研究者や関係者がほとんどです。そこでは専門用語、直面している課題とも共通で、お互いの意思疎通が、比較的スムーズにいき、当センターの研究教育成果も、理解されやすい点があります。それに対して、広島大学内の当センターの諸活動は、異なった専門分野の方々との交流、調整であります。すぐに顔を合わすことができる同じ学内でも、それなりの難しさがあります。ですから学内から、当センターのさまざまな研究教育、社会貢献活動や、その成果を評価していただき、当センターのさまざまな貢献を認めていただくにも、これまで以上の努力が必要と思います。何とか国際、国内、学内業務のエフォート・バランスをとって活動したいと思います。

前世紀の終わりに始まった大学改革の波は、まだ当分収まりません。それどころかますます急速、かつ大規模に改革が、進められるかもしれせん。当センターの研究教育社会貢献の成果が、何らかの形で現在進行中の大学改革に貢献できることを、センターの At Full Strength で目指したいと思います。

これまで当センターにご理解とご協力をしていただいた、国内と海外の高等教育関係者の方々、当センターの諸先輩の方々、引き続きご支援をお願いする次第であります。

## 戦略的研究プロジェクト

### ◆◆◆ これからの研究活動について ◆◆◆

藤村 正司

(前高等教育研究開発センター長／教授)

赴任して3年が経ようとしているが、今さらながらセンターは落ち着かない所である。学部長にさえならなければ、授業とゼミ生の指導をして、忘れられない程度に論文を書いておけば誰からも文句を言われない学部教員とは別の意味で忙しさが違う(学部教員からは暇そうに見えるが)。落ち着かない理



由は、学生という担保を欠いたセンター系組織の特徴だが、学内外の要請に応えなければならないミッションにある。例えば、センターは『大学論集』他の刊行物を出している。編集・査読には相当手間がかかっているし、近年は従来の委託事業に加えて新たに要請を受け入れている。センターの活動報告は、「コリエグ」やサイトに記載されているが、ざっと以下の通りである。

41回を数えた研究員集会（国際ワークショップ）、院生リクルートを兼ねた出前の「センター in ○○」、夏期公開セミナー（平成23年からは新任教員FD）、全国大学教育センター等協議会、IDE 中四国地区フォーラム、国際会議「アジアにおける大学教授職の変容」、今年で4回目を迎えるメルボルン大学とのジョイント・セミナー、各種公開研究会、先導的の大学改革推進事業、広島大学 URA 人材育成プログラム、そして平成18年度から5ヶ年計画で実施してきた戦略プロジェクト。戦略プロは、平成23年度から一般経費に組み込まれたから、恒常的に研究成果が求められることになる。

いずれも普通の学部では真似ができない事業だが、センターは法人化3期に向けて「全国共同研究・共同利用拠点」の仲間入りを目指している。センター設立以来の願望である。もしオーソライズされると、先行するセンター長によれば、軌道に乗るまで忙殺されることを覚悟しなければならない。そして、マンネリ化しやすい研究活動を飽きられないようにするには、イベントや国際会議を精査、ないしは隔年開催にしなければいけない時期にきているのだと思う。広島大学は「研究大学強化促進事業」に採択されたことは喜ばしいが、センターの刊行物や教員の論文数が10年で平均2倍に増えたところで、RIHEにとって高等教育研究にとってどのような意味があるのだろうかと思う。

そのことはともかく、戦略プロについては、これまで大学院やガバナンスを取り上げ、現在は機能分化に着手している。いずれもシステム内部の大きな論点であり、戦後体制の再検討を意味する。国際フォーラムについては、国際化でも大学院でも各国の制度や文化の違いを理解した上で、学生（留学生）のリクルートのノウハウとか、ラーニングアウトカム、アセスメント手法とか焦点をしばって取り上げていくべきであろう。また、古典的な国際比較やカントリー・レポートではなく、OECD や新自由主義に対する各国の対応の仕方を比較する方向性があるのであろう。

## ◆◆◆ 2013年度活動を振り返って ◆◆◆

渡邊 聡

（高等教育研究開発センター教授）

戦略的研究プロジェクトは、わが国の行財政改革と新発展を目指す「経済財政改革の基本方針2007」（2007年骨太の方針）を踏まえ、大学・大学院改革のための具体策に関する研究を行うことを目的に、文部科学省特別教育研究経費（戦略的研究推進経費）を得て、2008年度から実施されてきた研究プロジェクトである。当初5ヶ年計画で進められたこれまでの戦略的研究プロジェクト活動においては、①世界トップレベルの大学院教育の改革、②知識基盤社会における人材養成と教育の質保証、③高等教育の国際化・多様化と機能・役割分担、の三つの観点から研究を進め、併せて④国立大学や地方大学の充実を目指す改革、⑤競争的資金の拡充と効率的な配分、⑥国立大学法人運営費交付金の改革についても検討し、これらの高等教育研究成果の提供のための知識基盤を構築してきた。

また過去5年間に於いて、7冊の報告書（戦略プロジェクトシリーズ I～VII：『I. 大学院教育の現状と課題』、『II. 大学院教育の将来—世界の動向と日本の課題—』、『III. 国立大学の機能に関する実証的研究—地方国立大学に注目して—』、『IV. 大学教育質保証の国際比較』、『V. 知識基盤社会と大学・大学院改革』、『VI. 大学院教育の改革』、『VII. 大学財政・財務の動向と課題』）を刊行した。さらに、これまで東京ガーデンパレスにおいて5回に亘る研究成果報告会（第1回『大学院の国際的動向とわが国の現状・課題』（2009年3月14日）、第2回『大学院教育の将来—世界の動向と日本の課題—』（2010年3月13日）、第3回『知識基盤社会と大学—教育・教員の現状と課題—』（2011年4月16日）、第4回『大学院教育はどう受け止められているのか—教員・院生・社会人調査から—』（2012年4月28日）、第5回『大学・大学院改革

を担う大学教員の現状』(2013年2月23日))を開催した。

今年度から一般経費に組替えられ、第二期に入った戦略的研究プロジェクト活動による研究成果報告会は『グローバル競争時代における大学の多様化と機能別分化』と題して、4月26日(土)に東京ガーデンパレスにおいて実施する。また、今年度の研究成果として、上記②③⑤の研究テーマに関する報告書(戦略プロジェクトシリーズ VIII)『大学の多様化と機能別分化』を刊行した。

これらの報告書および研究成果報告会が、今後の高等教育の機能別分化・多様化の問題を考える上での実証的知見として、必要不可欠なエビデンスの一翼を担えるものとなることを期待している。

## 第41回研究員集会報告

大場 淳

(高等教育研究開発センター准教授)

第41回研究員集会が「大学のガバナンス～その特質を踏まえた組織運営の在り方を考える～」と題して、平成25年12月6日から7日にかけて広島大学学士会館において開催された。本集会の主題は、大学の一層の社会的貢献を求める昨今の国の政策において大学のガバナンス改革の必要性が強調されている中、その改革提言や実践について批判的に検討することを目指して選択されたものである。集会の一日目は、当該主題について組織論、実証的研究、国際比較等の観点から概観し検討することとし、二日目では、ガバナンスの一つの側面として教学事項に焦点を当てて、具体的な事例を取り上げてその成果や課題の報告を行い、総括的な討論を行うこととした。

第1日のセッション1では、講演1「大学のガバナンスを巡る現状と課題」が山本真一氏(桜美林大学)によって、講演2「高等教育におけるガバナンス研究のフレームワーク」が水田健輔(東北公益文科大学)によってそれぞれ行われた。それに引き続いてRIHE教員から、報告1「大学ガバナンスの実態～調査結果から」(村澤昌崇)と報告2「大学ガバナンスの国際比較」(大場淳)の二つの報告が行われた。これらの講演・報告によって、大学ガバナンスの現状や理論的背景、調査結果などが整理された。

国公立大学から1例ずつ教学ガバナンス改革の事例を取り上げた第2日午前のセッション2では、事例報告1「金沢大学における組織改革：改革の概要およびその影響について」が堀井祐介氏から、事例報告2「大学ガバナンスと教学マネジメント：首都大学東京の場合」が大森不二雄氏から、事例報告3「立教大学教養教育ガバナンス」が佐々木一也氏から、それぞれ報告された。これらの報告は、文書には現れにくい大学内部の意思決定を巡る葛藤等を伝え、教学事項を中心とした大学ガバナンスにかかる実践的な課題を明瞭に示した。

同日午後のセッション3は、「高等教育におけるガバナンス研究のフレームワーク」と題して羽田貴史氏(東北大学)がコメントを行い、引き続き総括討論が行われた。紙幅の関係から詳述は出来ないが、セッション2までの講演・報告並びにセッション3のコメント・討論を通じて、大学ガバナンスを巡る課題や政策上の問題等が浮き彫りになったと思う。詳細については、高等教育研究叢書として報告書が作成される予定なので、それを参照いただきたい。



## 国際会議報告（APA 科研）

### 大学教授職の変容に関する国際会議「アジアにおける大学教授職の変容—キャリア形成、仕事と学問的生産性、国際化を中心に—」に関する総括

黄 福涛

（高等教育研究開発センター教授）

2014年1月24日から25日にかけて、広島大学高等教育研究開発センター、文部科学省科学研究費補助金「21世紀型アカデミック・プロフェッション展開の国際比較研究」（研究代表者：有本章〔広島大学名誉教授、現くらしき作陽大学高等教育研究所所長〕）主催、くらしき作陽大学高等教育研究センター共催により、アメリカ、カンボジア、シンガポール、台湾、中国、ベトナム、マレーシアと日本国内から約50名の研究者と参加者が出席し、「アジアにおける大学教授職の変容—キャリア形成、仕事と学問的生産性、国際化を中心に—」と題して、大学教授職の変容に関する国際会議が開催された。

一日半の会議では、「大学教授職の報奨・国際化」、「大学教授職のキャリア形成」、「大学教授職の仕事と学問的生産性」という3つのセッションが設けられた。各国の研究者により、2つの基調講演および9つのレポートが行われた。

基調講演において、有本教授は、「大学教授職における R-T-S ネクサスの制度化—その国際比較—」について、多くの国々での昨今の大学教授職の変化が、研究、教育と学習活動の結び付きを進めていくことがなく、むしろその逆の方向で研究志向のみ強めてきた傾向があると指摘した。カミングス教授は、「強い政府、強いシステム」をテーマに、とりわけアジアでの成熟システムと新興システムにおける大学管理運営と研究活動の関連性について議論した。

また、9つのレポートは、アジアにおける大学教授職の変容に関する国際プロジェクトに参加している各チームが、共通調査票を用いて各国で実施したアンケート調査（APA 国際調査）の分析結果の一部である。具体的には、第一セッションでは、東京大学の北村准教授と広島大学の黄教授がそれぞれカンボジアの大学教授職の教育・研究の質と APA 国際調査に参加した6ヶ国の大学教授職の国際化について講演した。第二セッションでは、中国の北京大学からの閻教授と大学院生の李さん、マレーシア・プトラ大学のアイダ・スラヤ・ユヌス教授、ベトナム社会科学院心理学研究所のファン・タン・ナイ教授と名古屋大学の米澤准教授が各国の大学教授職のキャリア形成を中心に発表した。第三セッションでは、シンガポールのホー准教授、台湾国民及学前教育署長呉博士と台湾国立政治大学陳助理教授と広島大学の大膳教授がそれぞれの国における大学教授職の教育と研究の生産性に関する共通点と相違点を比較し、また一部の国の大学教授職の学問的生産性に影響する要因も触れた。

発表以外は、会議参加者は様々な問題についても活発な討論を行った。

参加者の多くは、以上のテーマのみならず、今後、他の関連課題も含めて、さらに国際共同研究を通じて追究する必要があるとの共通認識を高めた。





# 高等教育公開セミナー報告

## 平成25年度高等教育公開セミナー

村澤 昌崇

(高等教育研究開発センター准教授)

最近の大学を取り巻く環境は、質保証、入試改革、グローバル化に対応した人材育成、地域再生の核となる大学づくり、研究力強化、ガバナンス強化等々、様々な取組みが望まれる状況にあり、実際各大学も鋭意創意工夫に富んだ様々な改革や実践に取り組んでいる状況です。

そのような取組みの成否を検討するには、常に地道な観察と研究が必要です。そこで今年度は夏（8月19～20日）と冬（11月23日）の公開セミナーを開催し、センター教員が取り組んでいるさまざまな大学改革に関する先端的研究を紹介し、諸々の改革の動向を受講者の皆さんとともに読み解いていき、国際比較や統計分析などの実証研究の重要性を共有していくことを目標としました。

夏のセミナー（in RIHE）では「『高大接続テスト』の思想と課題」（大膳）「学士課程教育の課題とは何かー米国との比較から考えるー」（福留）「教学マネジメントを考える」（島）「戦後の大学改革が目指してきたこと」（藤村）「高大接続ーイギリスの独立学校から考える」（秦）「大学の設置形態と大学改革」（丸山）「フランスの大学改革の検証：大学の自由と責任に関する法律（LRU）の功罪」（大場）「国の政策波及と大学経営の対応」（廣内）「大学のガバナンスー大学の生産性を高めるガバナンスとは？」（渡邊/村澤）という多彩な講義が展開されました。冬のセミナー（in 岡山）では「新任教員へのFD活動をどう考えるかー広島大学の新任教員研究プログラムを参考にしてー」（大膳）「新自由主義的大学改革を考えるー国際比較の観点から」（大場）「大学教職員の退職給付制度に対する個人選好と関連知識ー教職員アンケート調査をもとに」（渡邊）「大学の適正な規模と範囲を考える：機関・部局レベルのデータを用いて」（村澤）が開講されました。いずれの講義も熱心な受講生に支えられて盛況であり、夏のセミナーでは、センター講師の熱意熱弁に心を動かされ、当センターの大学院を受講するに至った方もおられました。冬のセミナーにおいても、「職員にとっては地方でこうしたセミナーを開催してもらおうと足を運びやすい。勉強をしたいので、こうした機会をもっと増やしてほしい」というお声もちょうだいしました。そしてこのセミナーの恒例となっている懇親会は、セミナー以上に盛り上がり、お互いの情報交換や大学談義に花が咲きました。このようなセミナーを通じ、ご参加いただいた受講生の皆さんと過ごした貴重な時間を、今後の研究教育に生かせるように、センター一同改めて刻苦勉励する所存です。



## 「公開セミナー in 岡山」実施報告

大膳 司

(高等教育研究開発センター教授)

本センターでは、構成員の研究成果を社会に還元するためと大学院教育の広報を兼ねたセミナーを1年間に数回実施している。2013年11月23日、岡山駅近くのホテルサンピーチ岡山において公開セミナー（テーマ：大学改革の20年を研究する）を実施した。

セミナーの内容は以下の通りであった。

東京都から広島県まで、広範囲な地域から13名の参加者があった。セミナー修了後には場所を変えて情報交換会も実施した。こちらにも講師合わせて10名近い参加者がおり、高等教育を巡る現場の様々な

問題などの情報を交換する良い機会となった。

セミナーの広報や当日のお世話をいただいたセンター院生の藤原さんと川口さんにはこの場を借りて感謝申し上げます。

『新任教員へのFD活動をどう考えるかー広島大学の新任教員研究プログラムを参考にしてー』

(講師：大膳 司)

『「新自由主義的」大学改革を考える～国際比較の観点から』(講師：大場 淳)

『大学教職員の退職給付制度に対する個人選好と関連知識～教職員アンケート調査をもとに』

(講師：渡邊 聡)

『大学の適正な規模と範囲を考える：機関・部局レベルのデータを用いて』(講師：村澤昌崇)

大学院説明会

情報交換会

## 2013年度の公開研究会

\*肩書は当時のもの(敬称略)

	講 師	テ ー マ
第1回 (2013/4/15)	三代川 典史氏(アメリカ・ペンシルベニア州立大学グローバル・プログラム事務局研究員/広島大学高等教育研究開発センター客員研究員)	グローバルな大学への課題と展望 ー米国ペンシルベニア州立大学の場 合ー
第2回 (2013/5/13)	高山 敬太氏(オーストラリア・ニューイングランド大学教育学部上級講師)	世界文化理論を「局地化」する： 「一辺境」からの批判的視座
第3回 (2013/5/30)	堀尾 輝久氏(東京大学名誉教授)	リーダーシップ ーリーダーを育成するための教育と はー
第4回 (2013/6/17)	ジョンチョル・シン氏(広島大学高等教育研究開発センター外国人研究員/韓国・国立ソウル大学教育学部)	教育、知識と産業の相互関連性
第5回 (2013/10/19)	ロバート・ワーヘナール氏(オランダ・フローニンゲン大学教授)	大学の教育の同調事業(Tuning)： 日本の高等教育への示唆と課題
第6回 (2014/1/17)	小林 信一氏(国立国会図書館調査及び立法考査局専門調査員)	日本型 URA のあり方 ー世界の経験と日本の現状からー
第7回 (2014/1/31)	ペーター・トレンプ氏(スイス・チューリッヒ教育大学教授・研究開発部門長) トーマス・ヒルドブランド氏(スイス・チューリッヒ大学 教育開発部門長) 森 利枝氏(大学評価・学位授与機構准教授) 田中 正弘氏(弘前大学21世紀教育センター高等教育研究開発室准教授)	ヨーロッパ高等教育における進歩と 挑戦に対するボローニャ・プロセス の影響： 国際比較の視点を中心に
第8回 (2014/2/24)	ウルリッヒ・タイヒラー氏(ドイツ・カッセル大学国際高等教育研究センター教授)	ヨーロッパにおける高等教育 ーボローニャ・プロセスの神話と現 実ー



## センター往来【2013年4月～2014年3月】

\*所属は当時のもの（敬称略）

### <2013年>

- 4月 Jung Cheol Shin（国立ソウル大学）黄 梅英（尚綱学院大学）三代川 典史（ペンシルバニア州立大学）荻田 仁（内田洋行教育総合研究所）
- 5月 高山 敬太（ニューイングランド大学）Fabien Roudier（フランス政府留学局日本支局）堀尾輝久（東京大学名誉教授）
- 6月 なし
- 7月 加藤 毅（筑波大学）
- 8月 Chatupol Yongsorn・Somchai Thepsaeng・Apitee Songbundit・Puongrat Kesonpat・Jarawan Ploydoungrat・Sanong Thongpan・Amporn Kunchornrat（シーナカリンウィロート大学）
- 9月 山本 眞一（桜美林大学）
- 10月 Robert Wagenaar（フローニンゲン大学）
- 11月 なし
- 12月 **国際ワークショップ・第41回研究員集会招聘者** [Eric Beerkens（ライデン大学）Laura E. Rumbley（ボストンカレッジ国際高等教育研究センター）Kiyong Byun（高麗大学）近藤 祐一（立命館アジア太平洋大学）金子 元久（筑波大学）山本 眞一（桜美林大学）水田 健輔（東北公益文科大学）堀井 祐介（金沢大学）大森 不二雄（首都大学東京）佐々木 一也（立教大学）羽田 貴史（東北大学）] 吉野 耕作（上智大学）棟方 哲弥（国立特別支援教育総合研究所）

### <2014年>

- 1月 小林 信一（国立国会図書館）Rayburn Barton（サウスカロライナ大学）**APA 国際会議・アジア太平洋協議会招聘者** [William Cummings（ジョージワシントン大学）Khieu Vicheanon（カンボジア認証評価委員会）閻 鳳橋（北京大学教育研究院）Pham Thanh Nghi（ベトナム社会科学学院）Aida Suraya Binti Md.Yunus（プトラ大学）呉 清山（台湾国民及学前教育署）Ho Kong Chong（シンガポール国立大学）Gerard A. Postiglione（香港大学）Jung Cheol Shin（国立ソウル大学）Ahmad Nurulazam Bin Md. Zain（マレーシア科学大学）張 鈿富（淡江大学）有本 章・田村 周一（くらしき作陽大学）米澤 彰純（名古屋大学）北村 友人（東京大学）山本 眞一（桜美林大学）山田 礼子（同志社大学）吉永 契一郎（東京農工大学）] Peter Tremp（チューリッヒ教育大学）Thomas Hildbrand（チューリッヒ大学）森 利枝（大学評価・学位授与機構）田中 正弘（弘前大学）
- 2月 Ulrich Teichler（カッセル大学）
- 3月 町田 大輔（文部科学省）

## 喜多村和之先生のご逝去を悼む

有本 章

(くらしき作陽大学学長顧問／高等教育研究センター所長／広島大学名誉教授)

巨星墜つ。喜多村和之先生が2013年12月25日にご逝去された。享年77歳。広島大学名誉教授。博士(大阪大学)。訃報に接して深い悲しみに襲われた。喜多村先生は高等教育研究の第一人者として斯界を長年牽引されてきたことは周知の通りであるが、しかしあまりに早く他界されたことはとても残念である。

先生は、早稲田大学第一文学部哲学科をご卒業になっているように、高等教育研究において哲学的方法論に依拠して、持ち前の豊かな学識に裏打ちされた巨視的なアプローチを展開された。主に米国の高等教育研究を視座の焦点に据えて、歴史的な縦軸と日米比較を中心に比較的な横軸のアプローチを結合させて、数多くの名著を世に送られた。単著には『誰のための大学か』『高等教育の比較的考察』『大学教育の国際化』『大学淘汰の時代』『大学評価とは何か』『現代アメリカ高等教育論』『現代高等教育論』など多数、編著には『Changes in the Japanese University』『教育は「危機」か』をはじめ多数、訳書にはアルトバック『歴史のなかの学生』、トロウ『高学歴社会の大学』、ボイヤー『アメリカの大学・カレッジ』、カー『アメリカ高等教育の歴史と未来』ほか多数。論文数も多い。これらの著作にも窺われるごとく、歴史といっても過去に比重をおくよりも現在を見据えて未来を展望する方向で洞察力を発揮された。我々の世代では、研究者としてミクロではなくマクロの勉強を先にするべしとの指導を受けたが、先生はその典型であったように思う。

マーチン・トロウ、クラーク・カー、フィリップ・アルトバックなどの所論をいち早く咀嚼し紹介する仕事は、先生独特のすぐれた着眼点であったし、しかも時宜を逸せず絶妙のタイミングで研究され紹介された。トロウ・モデルは天野郁夫先生と共同で紹介され、日本の学界を席卷し、一世を風靡した。上記の三人やアーネスト・ボイヤーなどの多数の訳書には、原書をいち早く読破され、日本へ輸入して広める役割を率先して果たされた学風が刻印されている。

個人的には『大学教育とは何か』『大学授業の研究』などご編著に執筆させていただく中で、前者では米国の学者の理論を紹介したが、先生は日本ではこの理論に匹敵する研究が皆無なので立ち遅れているとぼつりと言われたのを覚えている。『学生消費者の時代』や『大学評価とは何か』があるように、大学教育には種々の角度から終始強いご関心を持たれていたのです、ご健在であれば今後ますます指導性を発揮されたに違いない。

私は大学問題調査室で勤務して大阪へ転出したが、その翌年の1972年に大学教育研究センターが創設され、先生は国立国会図書館調査員から助教授として赴任された。二人の転入と転出は入れ替わりになった。しかし図らずも1988年にセンターへ赴任し、同僚となって2年間と短い期間であったとはいえ親しく薫陶を受けた。先生が中心になって創設された高等教育研究の大学院には、比較高等教育研究の講座が設置されて自ら担当されたが、放送教育開発センターへ転出された1990年以後に私が継承した。

センターでは、東千田町の旧図書館のあの狭隘で貧乏な時代に18年間、「暮らしは低く、思いは高く」をモットーに研究や教育に大きな足跡を残され、発展の礎を築かれた。夜を昼に継いで日本の高等教育の行く末を考えておられたが、睡眠時間をあまりとられていないと観察したのは私だけではあるまい。

教育に熱心な先生は学生をこよなく愛され叱咤激励された。他に特筆すべきは、RIHE at Hiroshima University に執着され、大学の国際化に積極的に努められ、OECD やユネスコなどとの国際共同研究、さらに国際会議を再々開催されたことである。多くの著名教授を招聘されるなど、センターの世界進出とネットワーク構築に陣頭指揮をとられた功績が大きい。私がカー、トロウ両教授とUCBの高等教育研究センターにおいて昼食をご一緒した時にも、喜多村教授の世界的なご活躍の話で花が咲いた。先生の悲報は世界の人々を悲嘆にくれさせたのであるが、私が最近出会ったウルリッヒ・タイヒラー教授やウィリアム・カミングス教授もとても残念だと在りし日の先生の面影を偲ばれていた。

先生の学恩にあらためて感謝するとともに、謹んで心からご冥福をお祈り申し上げます。

## 新任者・離任者・就職者から一言

### 2014年度客員研究員

妹尾 渉 (せのお わたる)

国立教育政策研究所教育政策・評価研究部総括研究官



青木 栄一 (あおき えいいち)

東北大学大学院教育学研究科准教授

このたびは、広島大学高等教育研究開発センターの客員研究員に加えていただきまして光栄に存じます。私の研究領域は教育

行政学で、主として教育行政の政府間関係をテーマにしています。2013年に地方分権改革が教育行政に与えた影響を『地方分権と教育改革—少人数学級編制の政策過程』という書物にまとめました。拙著もそうですが、教育行政研究者の多くが初等中等教育領域をテーマとする現状があるとの認識から、2011年に日本教育行政学会の課題研究では高等教育研究と初等中等教育研究の「接続」を目指した企画に取り組みました。高等教育領域は、国家（中央政府）と高等教育機関との関係が問われますので、政府間関係論や組織間関係論を応用した研究ができないものかと考えています。



小貫 有紀子 (おぬき ゆきこ)

大阪大学未来戦略機構戦略企画室特任講師

このたび、客員研究員としての任を拝し、大変光栄と思うと同時に、身が引き締まる思いであります。現在は全学の教育改

革に関する職務を遂行する中で、これまで研究対象として捉えてきた大学のガバナンスやマネジメントの実際を、肌身で感じ、経験の中で学ばせて頂いております。大学マネジメントの現場では、高等教育研究のマインドを持った実践者の存在が強く求められているとともに、実践を普遍化し、共有可能な知見へと繋げていくための研究蓄積も十分とは言えません。その意味でも、伝統あるRIHEが高等教育において果たす役割がますます重要になってきていると思います。少しでもRIHEと高等教育の研究と人材育成に貢献できれば幸いです。どうぞよろしく申し上げます。



立石 慎治 (たていし しんじ)

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター／高等教育研究部研究員

このたびは貴センターの客員研究員を仰せつかり、大変光栄に存じます。貴センターにて高

等教育研究を学び、仕事としても高等教育研究に携わって参りましたが、現勤務先では、それらを基盤としつつも、初中等教育におけるキャリア教育の調査研究（キャリア教育による児童生徒の学習意欲の向上や、キャリア教育を進めるための組織づくりなど）に携わっています。思えば、初中等教育と高等教育は“切っても切れない”関係でもあります。双方を視野に納めた研究に挑戦することがここ数年の個人的な課題となりそうです。客員研究員の機会を積極的に活用し、RIHEの諸先生との交流を通じて、上記の課題に取り組んで参る所存です。どうぞよろしく願いいたします。





李 敏 (り びん)

信州大学高等教育研究センター講師

2013年までの5年間、研究員としてRHIEのお世話になりました。このたび、客員研究員を仰せつかり、大変光栄に存じます。RIHEに在任中は、マクロな視点で高等教育の研究を行ってきましたが、現職の信州大学においてはミクロな視点で高等教育に関する実際の問題に取り組んでおります。理論から実践への転換は戸惑いも伴いますが、これが逆に新たな研究の糧になりました。現在は、IR研究と大学院研究以外に、元留学生という立場から、日本留学の効果に対する研究をしているところです。今後ともよろしく申し上げます。



劉 文君 (りゅう ぶんくん)

東洋大学 IR 室准教授

このたび貴センターの客員研究員の機会を与えて頂き、大変光栄に思います。

「時光如箭（時の流れは矢の如し）」。当初中国教育研究機関の研究職を一時休暇して、短期語学・「遊学」するつもりでしたが、思わぬほど日本で長く勉強、研究を続け、今日に至りました。今まで、職業教育政策、高等教育システム、高等教育財政、高等教育評価など様々な研究課題に関心を持ち、取り組んできました。教育改革・改善のために、「政策的インプリケーション」に結びつき、「日中などの国際比較の視点」を持ち、実証的分析することは、私の研究の中でつねに求めてきたことです。

院生の時代から貴センターの出版物を読み、フォーラム、研究会などにも参加しており、特に東京大学大学総合教育研究センターに勤務した5年半の間に公私ともに大変お世話になりました。これからも、この機会を十分に活かして、研究を深めつつ、微力ながら少しでも貢献できればと思っております。どうぞよろしくごお願い申し上げます。

2014年度学内研究員



隠岐 さや香 (おき さやか)

大学院総合科学研究科准教授

私は科学技術史を専門としており、主に18世紀フランスの科学アカデミー史研究を中心に、「科学者」という職業がいかに構想され、制度的な位置を与えられてきたかを研究してきました。一般的な問題関心としては、現代も含め、科学が社会の中でどのような位置づけを与えられてきたかということ、また、自然科学と社会科学の分岐、科学と非科学の境界など、人間の文化活動としての科学の営みがいかなる「周縁」や「境界」を作り出すかについても関心を持っています。高等教育研究開発センターでは様々な地域についての研究にふれて更に視野を広げたいと思います。よろしくごお願い致します。



鈴木 喜久 (すずき よしひさ)

大学院社会科学部研究科准教授

経済学の中でもとりわけ実学色の強い計量ファイナンス、リスク管理学を専門としています。大学院社会科学部研究科における日本銀行や金融庁との連携講座を始めてちょうど10年になります。この間、実務の現場と大学との距離は大分縮まったように感じられますが、目まぐるしく変わり続ける経済社会の実際を高等教育の現場に取り込む作業はあまり進んでいません。実社会で伸びる人財として涵養しつつ、広島大学卒業生としてのアイデンティティーを確立させて世に送り出すための教育研究システムに関心があります。学内研究員をさせていただくこの機会に、皆様のご助言を賜りながら考えていきたいと思っております。どうぞよろしくごお願いいたします。



西堀 正英 (にしほり まさひで)

大学院生物圏科学研究科准教授

現在、大学院生物圏科学研究科・生物生産学部で動物遺伝学分野の研究と学生の教育を進めながら、文部科学省平成23年度理数学生育成支援事業「広島大学型アクティブラーニングによる研究者養成特別コースプログラ

ム」が採択され、その担当准教授として推進しています。将来研究者や科学者を目指す学生を学部学生から選抜し、それらの学生を対象に自ら学ぶスキルを授ける方法を模索しながら実践する日々が続いています。このたび、高等教育研究開発センターの学内研究員という絶好の機会をいただき、このチャンスを大いに活用し、研究者を目指す学生の夢にさらに近づけてやれるように努めたいと思います。さらに、研究者養成特別コースプログラムの実践で培った経験を基に、時代にマッチした広島大学型高等教育・研究システムを「教職員協働」で構築し、日本の高等教育をリードできるようなプログラムができればと考えています。ご指導、ご教授を期待しております。どうぞよろしくお願いいたします。



松崎 和俊 (まつざき かずとし)  
財務・総務室人事グループ主査

私は、職員の研修や評価など人材育成に関する業務を担当しております。高等教育研究開発センターの先生方には、研修の講師を担当いただくことのみならず、人材育成に関し多様なアドバイスをいただいております。この度、学内研究員をさせていただくことになり、さらに高等教育について学んでいき、職員の能力向上に生かしたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

## 2013・2014年度新任教職員



呉 書雅 (ご しょが)  
高等教育研究開発センター研究員  
(2013年8月着任)

中国語には「万巻の書を読むは、万里の路を行くに如かず(原語：讀萬卷書，不如行萬里路)」という諺があります。この諺は、去年の8月に研究員になってから最も実感したことです。

学生時代は、博論のため、論文や実例報告など決して少なくはない量の論文を読んできましたが、やはり多少「机上の空論」と感じていました。研究員として大学教育改革に関する調査に携わり、その中で、徐々に大学教育の全体像を学んでいます。

研究員になってから、ちょうど半年ですが、島

先生・藤村先生・小入羽さんのご指導、黄先生の支え、事務の方々のサポート、院生からの手伝いがあったからこそ、いろいろな困難を越えてこられました。この場を借りて、RIHEの皆様に、お礼を申し上げます。



佐藤 万知 (さとう まち)  
高等教育研究開発センター准教授  
(2014年4月着任)

このたび、高等教育研究開発センターに着任しました佐藤万知です。これまで政策や制度などの構造的変化が大学教員個人の活動や価値観の変容にもたらす影響に関心を持ち、研究や実践に取り組んできました。職場として身をおく大学を研究対象とし、日々、研究と実践に関わることは面白くもあり難しくもあります。センターでの活動を通じて高等教育を研究するとはどういうことで、研究者として、そして教育者としてどのような姿勢を持って取り組んでいけばいいのか、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。



鈴木 知恵 (すずみつ ちえ)  
高等教育研究開発センター研究支援員  
(2014年4月着任)

このたびは貴センターの研究支援業務に携わる機会を与您いただき、本当にありがとうございます。高等教育の研究とのことで私にとっては初めての環境であり、自分に業務が務まるかと不安もあり緊張しておりますが新しい職場への期待も同時に抱いております。

はじめての業務に慣れないことが多く、至らない点が多々あることと思います。

教員、職員すべての方々にはなにかとご面倒ご不便をおかけすると思いますが、少しでも早く業務に慣れ少しでもたくさんお役に立てるよう努力して参りたいと意欲をもっております。この四月よりどうぞよろしくお願いいたします。

## 2013年度離任者



福留 東土 (ふくどめ ひでと)

東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策コース准教授

センターには、合計13年間、在学・在職させていただきました。短い文章で振り返るにはあまりに思い出が多すぎて書き切れません（主な思い出はセンターレポートの退職挨拶に書きました）。この間、他大学で働いたり、海外に行ったりしても、帰る場所として自分の中に常にセンターが存在し続けてくれました。センターを離れて少し時間が経ってみて、これまで自分の研究がどれだけセンターに支えられてきたかを改めて痛感しています。しかし、これからはセンターに甘えることはできません。自分の願いと現実とのギャップの大きさに苦しむ毎日ですが、お世話になってきたセンターに本当の意味で恩返しできる日が来ることを夢見て、日々の研究・教育をポジティブに突き抜けていきたいと思えます。



安部 保海 (あべ やすみ)

教育・国際室研究員

RIHEでは2008年の8月から5年間、戦略プロジェクトの研究員として、21世紀の大学・大学院のあり方を探る調査・研究に携わりました。この活動の一環として、インタビューやアンケートなど様々な調査を行いました。RIHEに来るまでは物理学の研究を行っていた私には、その多くが初めて経験するものでした。その一つ一つは大変勉強になるものですが、その一方で不慣れな点も多く、研究員として十分な役割を果たしているかどうか不安を感じる場面も多々ありました。それにもかかわらず、RIHEの教員・職員・院生の方々には、在任中から現在に至るまで様々な面でサポートしていただき、大変感謝しております。現在はRIHEの所属ではなくなりましたが、高等教育の研究は続けておりますので、今後とも引き続きよろしくお願ひいたします。



荒木 裕子 (あらかし ひろこ)

学術・社会産学連携室研究企画室契約専門職員

このたび、学術・社会産学連携室研究企画室に配置換えとなり、6年間勤務したセンターを離れることになりました。セン

ターに来た当初は、高等教育研究について何の知識もなかった自分が、大学の仕事により深く関わることになったのも、センターでの職務経験のおかげだと感謝しております。センターで勤務した、あつという間に感じられる6年の間に、国内外の多くの方にお会いし、貴重な経験をさせていただくとともに、公私ともに可愛がっていただきました。紙面をお借りして御礼申し上げます。居心地の良いセンターを離れるのは寂しい限りですが、今後もセンターとは職務を通じてお付き合いがあると存じますので、引き続きよろしくお願ひいたします。



田川 實 (たがわ みのる)

2014年3月末退職

第二の人生足かけ12年間喜怒哀楽の日々でしたが、多くの感動・感激を味わって頂き感謝しております。先人の方たちの足跡を道標にされ高等教育研究開発センターのご活躍を祈念しております。

絆 がんばろう高等教育研究開発センター

## 就職者



三好 登 (みよし のぼる)

九州大学大学院人間環境学研究院助教

2014年4月1日から九州大学大学院人間環境学研究院の助教に着任することとなりました。任期は3年で箱崎キャンパスにおいて「第三段階教育における質保証と学位・資格枠組み（『文部科学省委託：平成25年度成長分野等における中核的専門人材養成の戦略的推進事業』）」に関するプロジェクトに従事することとなります。このプロジェクトと、私の博士論文の研究テーマである「大学・大学院生の学習成果と就職に関する実証的研究」とは、関連性が高いことから、プロジェクトに精一杯取り組むことが、博士号の取得、さらには研究の視野を広げていくことにも繋がるものと思われまます。今後ともご指導・ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



## 修了生



井上 大輝 (いのうえ だいき)  
博士課程前期修了 (2014年3月)

早いもので、RIHEに入学してから2年が過ぎ、博士前期課程を修了しようとしています。充実した施設、環境の中で「自分は何をすべきか」を問い続けた日々でした。書き上げた修士論文はまだまだブラッシュアップの必要なものではありませんが、この2年間全身全霊で取り組んだ成果を形に残せたことをうれしく思います。研究の厳しさ、楽しさを身をもって知ることができました。

最後に、この場をお借りして、至らぬ私に常に暖かいご指導を賜りました主任指導の藤村正司先生に厚く御礼申し上げます。藤村先生の下で過ごした日々は、私の貴重な財産です。



袁 婷 (えん てい)  
博士課程前期修了 (2014年3月)

本年度、博士前期課程を無事に修了することとなりました。2年半を振り返ってみて思うのは、RIHEは本当に恵まれた環境だということです。熱心に指導して下さった先生方や、サポートして下さった職員及び院生の皆様には大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

大学院の授業を受け、自分の研究を進めていく上で得たものは二つあります。一つは既存の研究における問題点をいかに解決するか、提案したものをどのように実現するかといった「論理的思考力」、次に、これまでにない新しいものを提案し、実際に構築するといった「創造力」。その研究能力は今後の仕事にも役に立つと思います。帰国してから、少しでも高等教育に貢献できるように頑張っていきたいと思っています。



林田 千織 (はやしだ ちおり)  
博士課程前期修了 (2014年3月)

最近文献を整理していると、分からなかったことが理解できるようになっていて、成長を実感しました。同時に、「こうすればよかった」と思うことが多く、修了間近になって研究と向き合う準備が整ったのかなと心惜しさ

も感じます。院生室と家を往復する淡々とした二年間でしたが、高等教育研究の面白さを経験できる有意義な日々を過ごせました。

今春からは福岡大学の職員として働きます。RIHEでの学びの姿勢を忘れずに、職員の立場から高等教育について学習していきます。主導教員の藤村先生をはじめとして、先生方、職員の皆様、院生には助けられてばかりでした。この場を借りて御礼を申し上げます。また、今後ともどうぞよろしくお願い致します。



原田 健太郎 (はらだ けんたろう)  
博士課程後期修了 (2014年3月)

2006年に博士課程前期に入学してから8年が立ちました。よくよく考えますと広島大学がこれまでの人生において最も長く所属した学校になります。その間、様々な方々のお世話になりました。この場をかりまして改めて御礼申し上げます。

振り返りますと、高等教育研究についてほとんど知らない私に研究の機会を与えて下さったこと、更にはどうか修了できるまでご指導下さったことに感謝申し上げたいと思います。

現在は大学評価の業務を行っていることもあり、今後は実践・研究の二つの側面から大学を理解していくことに努めて参りたいと思います。

## 新入生



伊藤 俊 (いとう しゅん)  
博士課程前期入学 (2013年4月)

高等教育開発専攻修士一年の伊藤と申します。昨年4月にRIHEの門を叩いてからおよそ一年が経ちました。この間、多くの方々にご指導・ご支援を賜り、まず以て感謝申し上げます。

RIHEでの勉強・研究に勤しむ中で、高等教育に係る様々な知識に触れる楽しさ、研究の構想・遂行の難しさ等、多くの貴重な経験を得ることが出来ました。同時に、多くの課題にぶつかり、迷いや葛藤を覚えた時もありました。修士の残り一年も、より困難な課題の待ち受けていることが予想されますが、勉強・研究を楽しむ姿勢を忘れずに、真摯に取り組んで参りたいと考えております。

高等教育研究の先端をゆく、この素晴らしき環境で送る大学院生活を悔い無きものと出来ませ

様、益々の研鑽に励む所存です。短い間ではありますが、今後ともよろしくお願い申し上げます。



木村 友紀 (きむら ゆき)  
博士課程前期入学 (2013年4月)

入学当初、フルタイムの職を持つ者であることや広島から離れた場所に居住していることからの「やり遂げられるか」という不安で占められていた感情は、およそ一年経った今、先生方を始めとするセンターの方々、他の学生の皆さんに協力いただいている「申し訳なさ」と感謝に変化しています。学生のいる大学を支える立場の人としてあるべき日常の自分と、学生としての義務を果たすべき院生の自分、どちらも理想どおりの自分でいようとするのはとても難しく、振り返れば、無意識に負担を感じる弱い自分に気づく一年でもありました。

ここからまた気持ちを新たに、自身の持つ限られた環境や資源の中でも、出来得る限りの探究をし続けていきたいと考えています。



長岡 朋子 (ながおか ともこ)  
博士課程前期入学 (2013年4月)

私立大学の事務職員として4年が経過し、学外や高等教育業界に対する情報収集とそれをインプットアウトプットする論理的思考や特殊な業界のシステムやこれからの現状を学ぼうと、こちらの大学院を受験しました。社会人学生ということで、先生方やRIHEの皆様にも多大なご協力を賜りながら授業履修を行っており、無事1年間を乗り切る事が出来ました。

常に学ぶ意識や姿勢を持ち続ける事は大学職員としてだけでなく、人としても非常に大切なことであると気づかされるとともに、業務に直結した内容を充実した環境で学ばせていただけていることに感謝しています。

RIHEで多くの知識をこれからも吸収し、高等教育について学んでいきたいと思えます。



真鍋 亮 (まなべ りょう)  
博士課程後期入学 (2013年4月)

30歳になったある日、自身の生き方・働き方を考えた。そこで出した答えはこうである。20代は、様々なことに挑戦し可能

性を広げること。30代は、進む道を決めそこで根を張ること。40代は、花を咲かせる(成果を発揮すること)。50代は、後に引き継ぐこと。では今何をすべきか?と考え30歳で修士課程へ進み、32歳の今年、RIHEの門を叩いたのである。

4月に入学してから現在まで、とにかく忙しかった。家では夫であり父であり、職場では職員であり部活の指導者でもある私は、まず学習時間の確保に苦労した。入学時、妻に「今回で草鞋は何足目?」と聞かれたほどだ。そのような中でも実りは豊かで、さらに素晴らしい出会いから多くの刺激をいただき、充実した時間を過ごせている。

自身の人生においてRIHEで学ぶこの時間は、特に重要なものになると感じている。ここで努力し成長し、10年後には立派な花を咲かせたい。

\*上記の方々以外に、2013年4月は、前田一之さん、野村朋絵さん、三上亮さん、林師敏さんが博士課程後期に入学されました。

## 研 究 生



謝 妍笑 (しゃ けんしょう)  
(2013年10月入学)

2013年10月より、研究生として半年間RIHEで学ばせていただきました。RIHEの方々から、学問のことだけではなく、生活の面で色々とお助けいただきました。毎日新たな知識を学び、刺激的な生活でした。また、センターで、様々なイベントを行い、たくさんの視点に触れ、自分が足りないところがたくさんあるという事実を反省することになりました。もの知らずの私に対して、丁寧に指導をしてくださった先生方、先輩方には、心から感謝しております。

2014年4月からは博士課程前期に進学をさせていただくことが決まりました。大学進学における日中比較について研究したいと思えます。これから精一杯頑張っていきたいと思います。今後とも、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

## センター滞在記



### Reflection at departure!

**Jung Cheol Shin**

(Associate Professor, Department of Education, Seoul National University, Republic of Korea)

Time goes so fast last three months at RIHE. When I arrived at Higashi Hiroshima, it was still cold, then suddenly Spring came up with beautiful cheery blossoms, and hot summer soon after. I had ambitious plan during my visit RIHE — a little bit relax and keep away from my daily life in Seoul to make further leap up after my sabbatical leave, and also to learn Japanese to deliver a course in Japanese someday. Plan is plan as usual... I was not exception of this case and many colleagues at RIHE always work hard even during weekend. I was never alone when I work on Saturday or Sunday in my office.

My personal talks with colleagues at RIHE are invaluable to think about my research and academic life in the future. I appreciate insightful comments from my colleagues at RIHE on my presentation, which is a little bit away from my academic research so far. Open I am wondering whether I am on the right track when I develop my research ideas. It is not easy to find colleagues who share the research interests and who give thoughtful comments on my ideas as a critical colleague. RIHE is the center of my critical colleagues in Asia. I never meet such a variety research interests in an institute in other Asia institutes. I met colleagues who share the research interests at RIHE. There are many more things that we could share and collaborate together.

However, I should mention that how I enjoyed living in Hiroshima. In my academic journey, I gave up my time to share with my family while I was in Seoul. I am always working on something on my computer at home. Here, I have better time to share my weekend with my family. I visited Miyajima and Iwakuni with my wife and daughter last week. I think that it is my first trip to somewhere with my wife and my daughter since last 2004 when I returned to Korea from the USA. We also watched Hiroshima Carp's game last May. It was my first experience to watch professional baseball game in Japan. These never happen in my academic journey in Korea. As a scholar, I am always adventuring new world which is new research topics, but I am keeping same patterns for my social and family life.

At my departure, I should mention that one of pleasure of staying in Saijo is enjoying Japanese Sake at Izakaya. I often go Izakaya with colleagues and my wife to enjoy normal life in Japan. Also, I really enjoy riding bicycle from apartment to RIHE every day. I may not ride a bicycle more than the last three months in the future. Also, I have good memory of my last restaurant tour with Daizen sensei last June 29, 2013. We went a rotating sushi restaurant near to Saijo Station. It was special experience of enjoying various sushis in a place. Also, I should mention that I learned how to enjoy tea. I am sure that tea will be my good friend during my entire life.

If someone asks me what you have done during last three months... I met good friends, we talked about research networks with Asian scholars. If someone asks me what academic things you have done, I would answer that I will answer to the question at end of 2014 because a book on Asian mass higher education will be published in 2014 with many RIHE colleagues. Many authors are at RIHE and most of them are my academic friends during my academic journey.

I really appreciate your hospitality and kindness that you showed me during last three months! Thank you RIHE!!!

(シン先生は、平成25年4月から6月まで広島大学外国人研究員としてセンターに赴任されました。)



# 情報調査室だより

前号に引き続き、今号も所蔵資料の一部等をご紹介します。  
これを機に情報調査室の所蔵資料を皆様にご紹介いただき、ご活用いただければ幸いです。



## 所蔵資料紹介

### 『高等教育関係 一般雑誌記事のクリッピングズ』

専門雑誌以外の一般雑誌に掲載された高等教育関係の記事を個別に収集しています。  
収集記事は所蔵資料検索サイト「文献情報総合検索」で検索することができます。  
人々の生活に身近な資料から高等教育の変わりゆく様子をみる事ができるユニークなコレクションです。



## RIHE ホームページ 情報調査室コーナーのご紹介

RIHE のホームページ上に「情報調査室コーナー」を設け、利用案内、新着資料紹介など情報調査室に関する情報発信を行っています(イラスト1)。

新着資料紹介ページ(イラスト2)では、新規受入図書・資料の書誌情報を見ることができます。(日々更新)是非一度のぞいてみてください。

情報調査室コーナー

イラスト2  
新着資料紹介ページ

情報調査室コーナー・情報サービス・新着資料紹介

センタートップページ 情報調査室コーナー

所蔵資料は、Web上で検索することができます。  
所蔵資料検索システム「文献情報総合検索」をご利用ください。

- 和図書・洋図書(消耗品含む) >>バックナンバーはこちら
- 国内外大学・官公庁・諸機関の報告書類(広大発行資料含む)  
・ 2014年2月受入れ分 >>バックナンバーはこちら
- 国内外大学使覧・シラバス(広大使覧類含む) >>バックナンバーはこちら

イラスト1  
センターHP トップ画面